富山県立伏木高等学校　学校長だより　ＶＯＬ．９　　R5.12

校長の高野です。
今回は、伏木けんか山祭りの「ここに注目！」というテーマで、前号に引き続き特別講師として野口安嗣先生にご解説していただきます。

伏木けんか山祭りの歴史と今（後編）

５月の第３土曜日に行われる「伏木曳山祭り」は、通称「けんか山」とよばれ、昼は７基の花山車、夜は提灯山車へと姿を変え、伏木の町を奉曳（巡行）します。

昼の花山車には、「前人形」とよばれる小ぶりな操り人形と、下記の表のように各山町ごとに異なる「福神」が乗せられ、山車の上部には神様を迎える「だし」が飾りつけられています。

ヤマ	中町	上町	本町	寶路町	石坂町	湊町	十七軒町
福神	福禄寿	布袋	弁財天	恵比寿	大黒天	毘沙門天	寿老人
だし	千成瓢箪	笹竜胆	鈷鈴	重ね分銅	「壽」	胡蝶	法螺貝

「福神」は七福神、「だし」は子孫繁栄や冨貴蓄財などをテーマに各山町の福を授かれるおもいが込められています。花山車の魅力は装飾の美しさもさることながら、曳山が狭い角の路地を回るときの迫力が見ごたえです。

夜の提灯山車では、奉曳（巡行）の最中に本町広場と法輪寺前の２カ所で「かっちゃ」が行われます。「かっちゃ」とは、地元では余興と呼ばれ、重さ８トンもある山車同士が一対一で「かっつけ合い」をすることをいいます。余興での山車と山車の距離は２５ｍ、対戦する２つの山車の代表である総代が何回山車をぶつけ合うかを話し合い、「かっちゃ」が始まります。総代の合図で互いに走り出し、山車と山車をぶつけ合い一度ぶつけるとすぐに引き離し再度対峙します。このぶつけ合いが何度か繰り返され、あと何回するかを決める総代同士の掛け合いが見ものです。ケーブルテレビの解説席から実況していると、ぶつかったときの腹の底に響く衝撃音や、山車が一瞬浮き上がり提灯が大きく揺れる迫力に観客からは大きな歓声が沸き上がります。対戦後、お互いに山車と山車を近づけて、総代が付長手の上で握手をし一つの対戦が終了します。すると、何人もの若者たちが付長手の上に乗り「イヤサー」（いや栄え）のかけ声と共に各山町に伝わる賛歌を歌い、お互いの健闘をたたえ合います。この「かっちゃ」こそが、「伏木曳山祭り」が「けんか山」と称される所以なのです。

余興終了後、各町の山車は再び奉曳（巡行）にもどり、伏木神社へ御幣を返したあと、山倉にて御神楽の音色とともに伏木の熱い一日が終わりを告げます。

（文責　野口 安嗣）